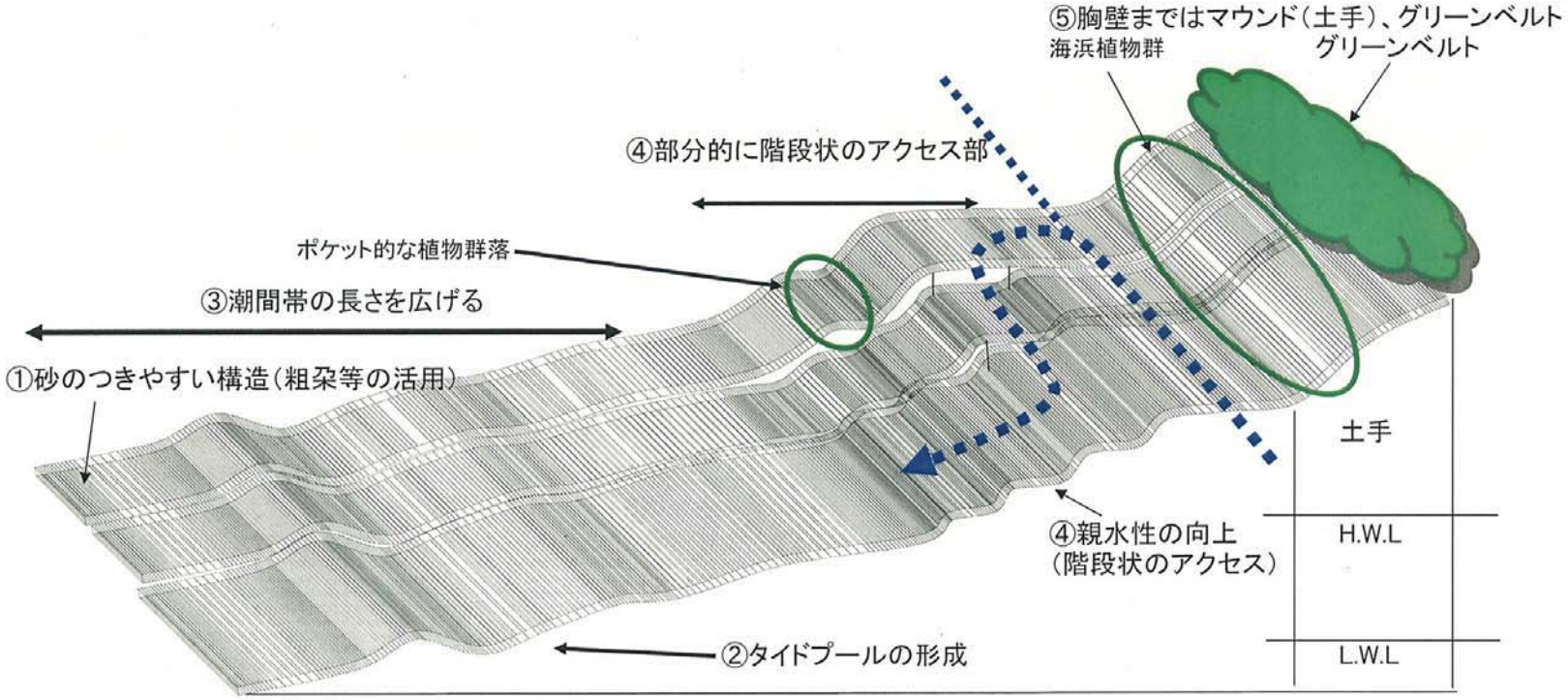
Ⅱ. 護岸の当面の改善案

理想的な海と陸との連続性、自然再生・後背湿地再生、水循環の再構築には、土地利用、まちづくり、河川の問題等、解決すべき問題が多いので護岸の改善策として、圧迫感のある直線を極力少なくし、曲線を用い景観的にもやさしい曲線とする。
①砂のつきやすい構造、②潮間帯は、生物が生息しやすい緩やかな傾斜③左右からと下りやすい階段状の部分を作りアクセスの向上④ポケット的な植物群落と胸壁の上は土手にし海浜植物群落とグリーンベルトの形成、を行なう。



市川市委員提案（抜粋）

三番瀬再生計画案　2004 年

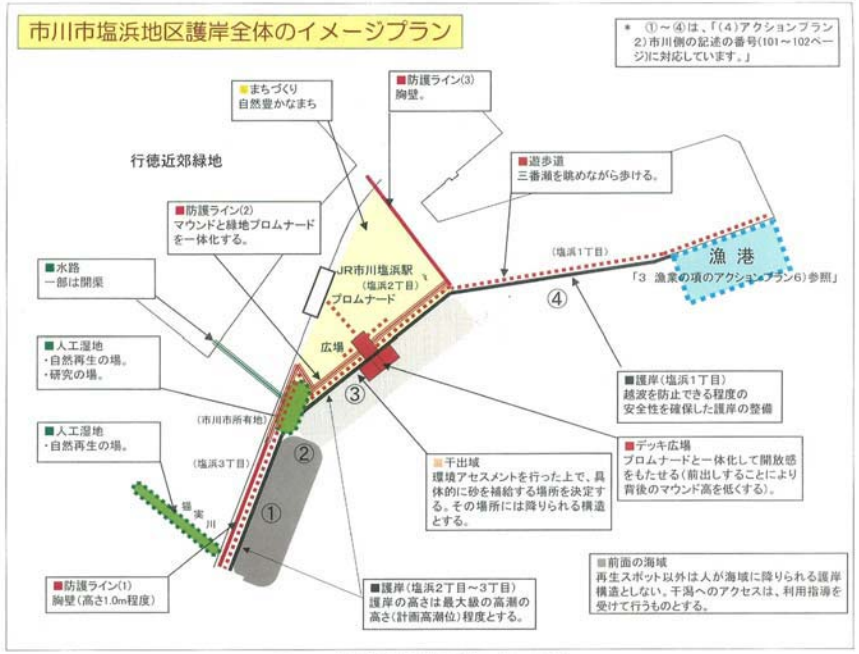


図2-5-14　市川市塩浜地区護岸全体のイメージプラン

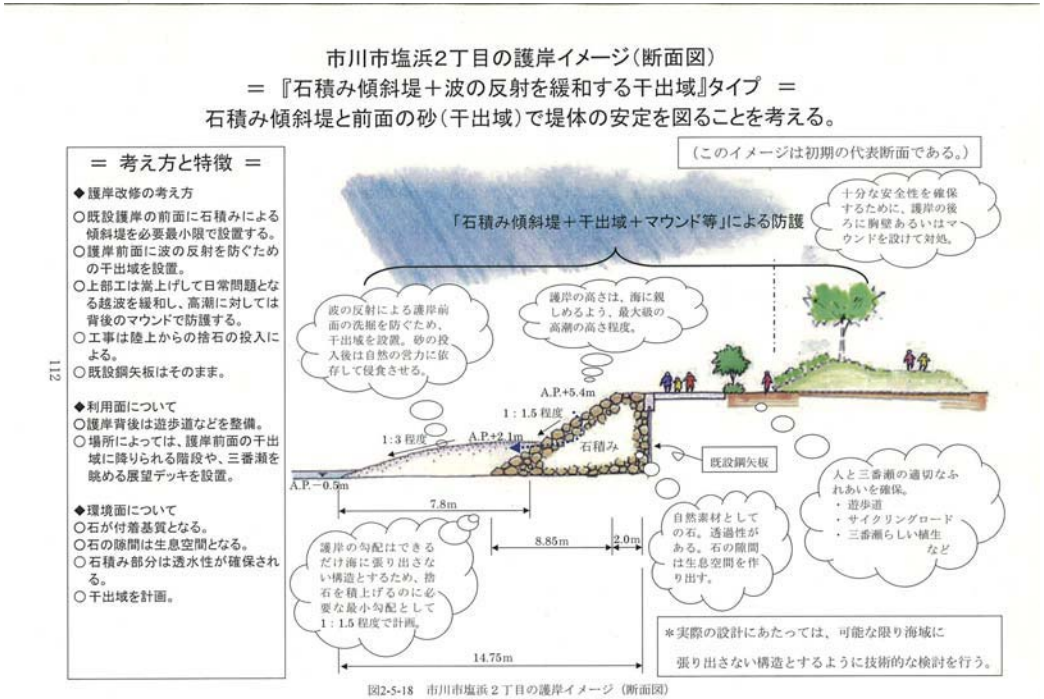
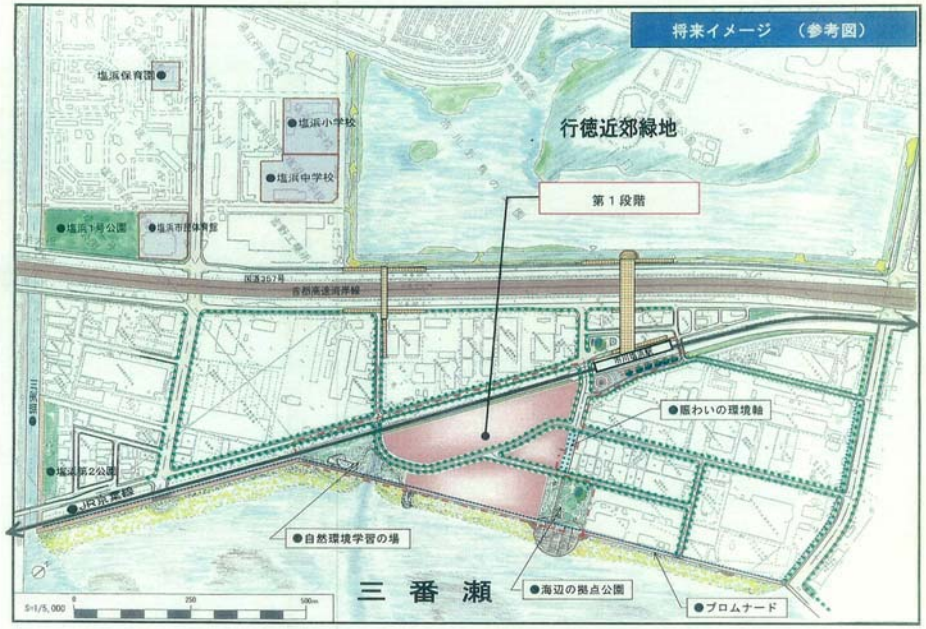
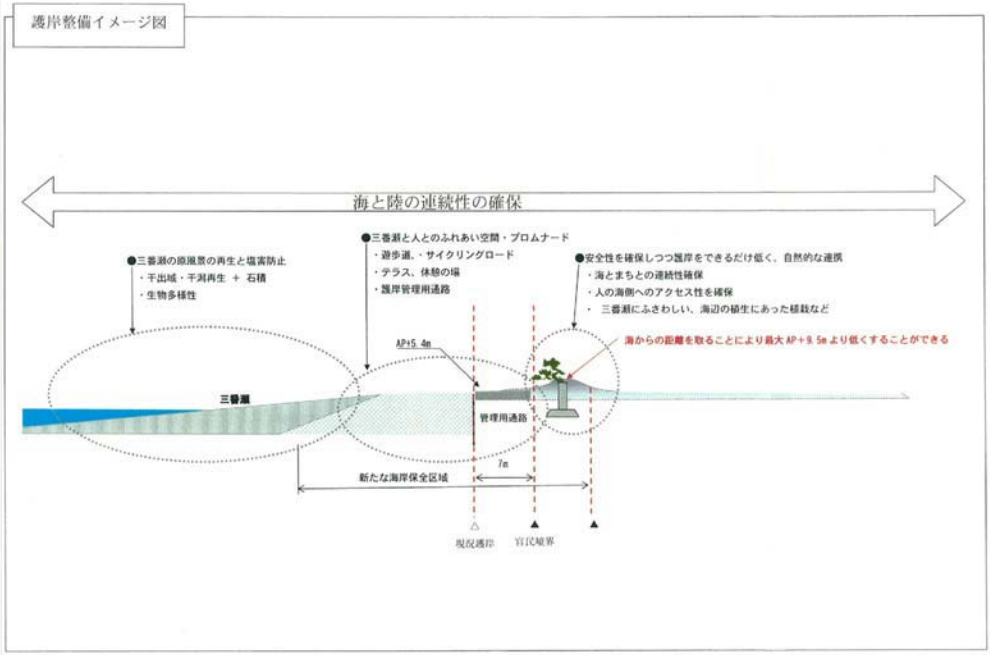


図2-5-18　市川市塩浜２丁目の護岸イメージ（断面図）

塩浜地区まちづくり基本計画





竹川委員提案

断面、バリエーションについての提案

（具体的な提示は出来ませんが夫々すでに提案されているか、多くの実例や、資料が出されています。）

（一）、粗朶沈床についての提案

後藤隆委員が提案されている粗朶　沈床を護岸基礎部に用いた断面案を検討していただきたいと思います。重量不足の問題につきましては最も実績（海岸護岸）があり、研究指導もし、三番瀬護岸も視察し、フェスタで発表されている専門家若月氏にぜひ具体的な実験提案を示していただくよう護岸検討委員会として要請して頂くよう希望します。重量不足については清野委員が紹介された福井県三国港のエッセル突堤（明治15年完成、平成15年現在なお風波の強い三国港の海岸突堤として機能し、その優秀性がみとめられ、重要文化財に指定された）の例にならい、基礎の上に”巨石”を積む例もあります。

（二）ラップストーン護岸（海岸護岸用）について

自然共生型の海岸保全施設として、福岡県が実施した和白地区、農水省の有明東部地区、福岡県の香椎地区などの例にある、ラップストーン工法、かに護岸？の実施例を検討していただきたいと思います。生態系を守る海岸保全施設として紹介されており、問題となっている、”海に張り出す”こともないメリットがあります。緩傾斜にすればするほど生物が住み着くと説明されていますが（代4回護岸検討委員会資料）がそれは護岸付着生物に限られた話であると思います。この工事の場合護岸陸側との連続性（浸透性など）よく分かりませんが環境工学（株）などの説明も欲しいと思います。